



# 町民文芸

## 只見短歌会 九月詠草

大塚栄一 指導

縁に出て足の爪切る透析の夫の背またも小さく見ゆる

古川 英子

絶へ間なく地から湧く如き虫の声かはたれ時の庭は涼しき

小倉キミ子

年ごとに縁者増えゆく秋彼岸香華の中に在りし思ふ

渡部ゆき子

逝きし娘の好みし花の秋海棠色濃く咲けば仏前に活く

馬場 八智

旅姿時代劇に見る杖と笠田の畔歩む媪は似たり

新国由紀子

喜寿迎へ生かされしことに感謝のみ同級会に友と交はる

関谷登美子

童心に戻りし如き面差し友我を見ず花に寄りゆく

目黒 富子

またひとつ夏の休みの恒例のラジオ体操の放送は消ゆ

渡部ヨリ子

臥す部屋に野菜を刻む音ひびくわが若き頃の日課の如く

新国 洋子

(出詠順)

## 只見俳句会 十月例会

目黒十一 指導

蔦茂るいだきて隠す大薫家

味代子

新涼や髪切り手添え老いの霜  
背を押して遊ぶ風あり野分かな

産土の谷より生れし秋の雨  
一夜にて玉蜀黍は獣の餌

一穂

このところ雨容赦なし貝割菜  
膝元のさみしくなりぬ秋彼岸  
つんと香の胸つく早稲の刈田道

礼

老战友とかたき握手や土瓶蒸し  
隣組の秋の行楽車列組む  
落鮎の尾鱗に塩の姿焼き

吉見

秋あかね姉妹のように戯れて  
ゴンドラに乗りてすんなり秋の来る  
蟋蟀やグラランドに引く長き線

順子

秋雨に軒先借りて奈良井宿  
ヒヨドリが鳴くや朝餉の旅の宿

信

我が影や冷たく長く秋の夕  
酒瓶を持ちて出掛ける夕月夜  
コンバイン洗う男の夕日かな

修一

仲秋やだんご不揃いまんまるに  
立ち話し短かく長し秋の雨

都